



タイのミャンマー人が働く海鮮の街から —移民労働者の子どもたちの教育を考える—

やぎさわ かつまさ
八木沢 克昌

●公益社団法人シャンティ国際ボランティア会・アジア地域ディレクター

タイの首都バンコクから南に車で40キロ走るとサムットプラカーン県マハチャイの街がある。タイ湾に注ぐターチン川が流れ、河川港があり、エビの街としても知られる。街の中心にはエビ等の海鮮市場がある。港の近くには「タナカ」と呼ばれるミャンマー伝統の白っぽい顔料を塗った女性の姿が見える。タイ国内有数のミャンマー人の街だ。

移動図書館車は、マハチャイの街の外れのワット・シリモンコン小学校を目指して走る。小学校はタイ政府の運営する公立小学校だ。道の両側には日系の水産加工の工場も点在している。小学校の隣には屋根の瓦がオレンジ色の三角形の鮮やかなタイの仏教寺院がある。学校は創立されてから80年の歴史がある。

移動図書館車は、私が属するシャンティ国際ボランティア会のタイの現地法人であるシーカー・アジア財団が小型のトラックを改造し移動図書館車として特注し、運営しているものだ。タイ語とミャンマー語等の絵本を中心に300冊を搭載している。移動図書館車の活動には日本の労働組合の基幹労連等が20年に渡って支援を続けている。

活動は歌と遊びから始まる。子どもたちの緊張がとけたら世界の名作の絵本の「おおきなかぶ」（A.トルストイ 偕成社）の「読み聞かせ」、そして、人形劇、自由読書と続く。私たちが軸とする「読み聞かせ」の読書推進活動は、ミャンマーの伝統的な学習スタイルとは異なっている。仏教国のミャンマーでは、寺院での経典を暗記した伝

統から「知識暗記・復唱学習」型の教育も残る。ミャンマーでは、現在でも厳しい受験戦争を生き残るために両親から「絵本を読む暇があったら勉強しなさい」「家で読む本は試験勉強のための本だけ」という子どももいる。読書推進活動といっても日本の現在の絵本や「読み聞かせ」とは大きく異なる。私たちが大切にする読書推進の支柱は、子どもたちが声をあげて笑い、読む楽しさを知り、世界を広げ、知る喜びを味わい、想像力を養う土台を築くことを願ってのものである。

さらに衝撃的なのは小学校の子どもたちの民族構成だ。タイ国内にありながら全校生徒が幼稚園から小学6年生まで647人。ミャンマー人が192人、ミャンマーからのモン人が236人、ミャンマーからのカレン人が46人、カンボジア、ラオス、タイと続く。生徒の実に9割以上がミャンマーからの移民労働者などの子どもたちだ。小学校の教師は全体で28人。タイ政府の公務員の教員は10人で、残りは非正規のボランティア等の教員だ。非正規の教員は学校が募集して給与を支払う。教師にはミャンマー人が2人おり、うち1人はミャンマー国内の大学院の修士号を持つ。

コロナ禍前の2019年は全校生徒が290名であった。現在は何と647名と倍増。原因は「ラーニング・センター」と呼ばれるタイ政府が公認し民間団体が運営していた学校の大半が教育の質等の問題を理由に一時的に閉鎖されたことだ。「ラーニング・センター」では多くのミャンマー人が学んでいた。



移動図書館車と人形劇を楽しむ子どもたち

小学校の生徒数も昨年と比較しても122人増えている。学校での共通語はタイ語。しかし、校内ではミャンマー語やモン語、カレン語も飛び交う。タイ政府のカリキュラムに従いミャンマー語も教えている。タイ政府は言語等の課題もあるが、移民労働者の子どもたちにも制度的には公立小学校での教育の機会を認めている。

大きなジレンマは、学校の敷地の中で校舎の取り壊し現場と古い木造の校舎が隣り合わせになっていることだ。工事現場に学校があるような状態だ。

教室の不足により年少の幼稚園の部の教室は40人以上が学ぶ超密集状態。タイ語が母語でない子どもたちの食事からトイレ、そして、カリキュラムに沿って学びを保障して安全を守るだけでも大変な仕事だ。教室、教師、資金の不足という三重苦の問題を抱えている。3年前からのコロナ禍の問題の多かった期間には学校は閉鎖されてオンライン授業で対応していた。

タイ国内の移民労働者の数は、ミャンマー、カンボジア、ラオスの3か国にベトナムを加えて2022年8月の時点で2,167,937人(タイ労働省雇用局外国人管理局室)。実際にはその数は倍以上の500万人を超えると推定されている。タイ国内の少子高齢化に代表される労働者不足と周辺国に産業が少なく、現金収入を得られる仕事がないことが原因だ。特に、バンコク近郊では労働集約型の工場等で労働者の取り合いとなっている。

キティクーン・ラオコディー校長は「この地域

のミャンマー人等の外国人労働者のうち、約半数は就労ビザが正規、半数が非合法」と推測する。親が法的に非合法であれば子どもたちも非合法。子どもたちも警察に捕まれば検挙されてしまう。学校では検挙を防ぐために子どもの名前、写真、学校の電話番号の書かれた「スマート・カード」と呼ばれる学校独自の身分証明書を発行している。発行費用は学校が企業等から寄付を募って賄っている。ミャンマー人であっても母語とタイ語を習得して知識と技術を持てば低賃金単純労働から解放される。貧困の悪循環を断ち切ることにつながる。

マハチャイにある日系の水産加工の工場で生産されるエビ等の行先の多くは日本である。日本では少子高齢化に悩み労働力不足が深刻になっている。毎年、約60万人の人口が減少している。特に農業や漁業、建設業、飲食、介護等に関わる人材が絶対的に不足している。さらに円安が輪をかけてタイから日本への出稼ぎは不人気になっている。日本で仕事をするメリットは少なくなっている。

移民問題だけをとっても一国では解決できない時代である。国境を超えた貧困の再生産という負のサイクルを打ち切る地道な教育への支援が不可欠である。私たちNGOの使命は将来の社会を担う子どもたちの「教育の機会」を途絶えさせないこと。そうつくづく思った移民労働者の働く海鮮の街、マハチャイだった。